



画像診断のはなし



診療放射線科
増田 慎吾

読影の話

CT検査やMRI検査の結果は、担当の医師(主治医)が説明されていると思います。しかし実際に撮影された画像担当の医師だけが見る訳ではありません。今回は検査をしてから結果を説明されるまでをお話したいと思います。

検査後、担当の医師に説明されるまで

撮影した画像を最初に見るのは僕達、放射線技師です。金属など写ってはいけないものがないか、見たい範囲が写っているかなど、問題なく検査が出来ているかを確認します。さらに言えば、病変がよくわかるような撮影が出来ているか、予期していない病変がないか探すことも意識しています。ただし放射線技師が最初に画像を見て病変がわかって、それを患者さんに説明することは出来ません。放射線技師は画像診断の補助(医者に助言)のみ可能であり、診断することが出来ないと法律で定められています。患者さんに検査結果を説明するという事は診断するという事と同じになるので、この段階で放射線技師が結果について説明することはできません。

次に見るのは、「画像を読む」ことを専門とする放射線科の医師です。CTやMRI、核医学検査などで撮影された画像は多くの場合、放射線科の医師が診断(読影)します。この診断結果はレポートとして残され、担当の医師が見ることができます。画像診断のスペシャリストである放射線科の医師が先に見ることで、より詳しい病変の状態がわかったり、予想外の場所にある病変を見つけることができます。



放射線技師

- ・ 検査実施
- ・ 画像確認
(異物の有無)
(病変の有無)



放射線科医師

- ・ 画像確認
- ・ レポート作成

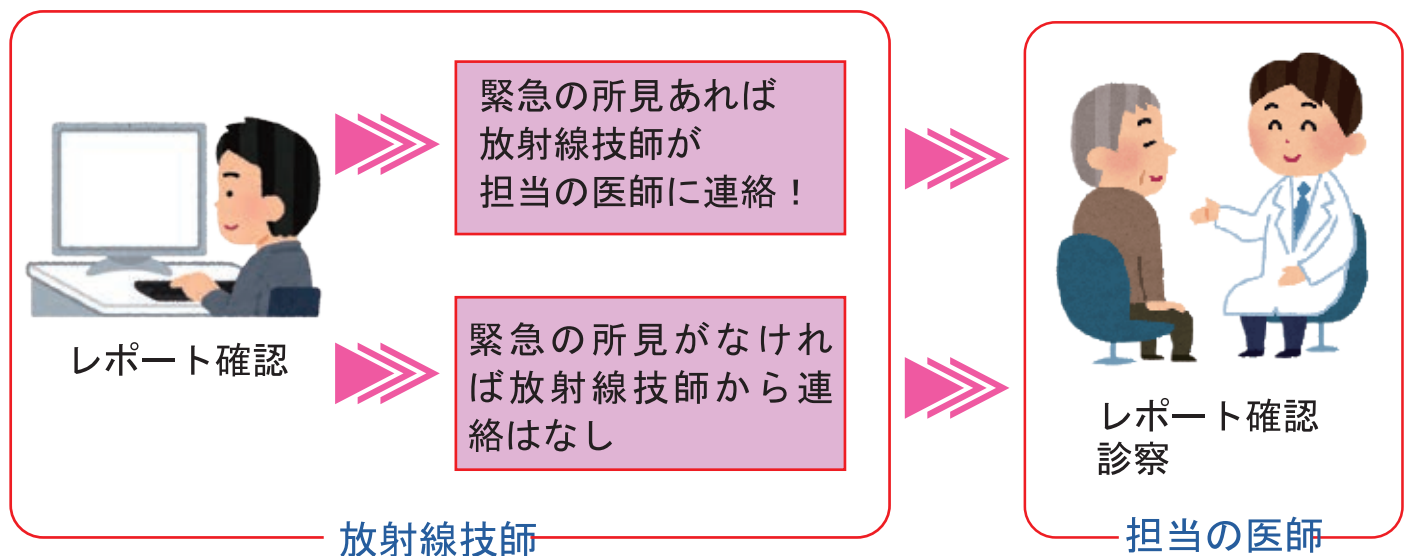
■ 画像レポートの重要性について

このように、検査の結果が担当の医師より患者さんに説明される前に、多くの場合、放射線科の医師が画像を読影します。

報道などでご存じかもしれませんが、ある病院でCTによる画像診断で癌が見逃されてしまい、早期で治療できず癌が進行しまった、ということがありました。この事例は担当の医師が専門外である肺癌の所見に気づくことができず、かつ肺癌を指摘していた放射線科の診断レポートを見ていなかったということが原因であると言われています。

当院ではそのようなことを防ぐために、緊急性のある病変や担当の医師が予測できない病変があれば、電話やメールで連絡するように放射線科で取り組んでおります。

● ● 放射線科の画像レポート確認漏れ対策の取り組み ● ●



■ 最後に

簡単ではありますが、「読影について」と「病変の見逃しを防ぐための取り組み」についてお話させていただきました。

当院ではこのように放射線技師・放射線科医・担当の医師が協力しながら患者さんの検査の結果を出しています。病変の見逃しを防ぎ、正しく病変が見つかるように取り組んでいますので、安心して検査を受けて頂ければと思います。